

昭和十三年

(二十八)

合掌 南無阿弥陀仏

京都では、静かな会座が開かれています。柴野大徳寺の広大な境内の外廓にある家で、青葉が見えて静かな所です。今朝、守安先生が今来しました。上森君は会社が忙しくて来ません。これから原稿を早く書こうと思います。六月の聖講の時にあまり仕事がないようにしたいと思います。

今日一日、今日一日、真に衷心から念仏の申されるように生きさせてもらいましょう。砂をかむような日があれば、必ず静かに合掌してみ法に聞き、更に自己に沈潜内観して、道光明朗の世界に出して頂こう。

語ることに満足や意義を見出すのでなくて、教えを吸収する、受け取る、沈黙の世界に五劫思惟の御心がほのかに領解せられるようであります。

私がおちつかぬ日に世界がおちつかぬように見えるようです。

今、若が唐紙一重の所で前講しています。

昭和十三年五月十五日

夜晃

佐々木温三様

1

(二十九)

汝今以後徳山支部団員は

一、外相に光明団団員たるの風を示さず（勤務先等に於いて「光明」、「聖光」をあらわに見せびらかし我は光明団団員なり、念仏行者なりとの風を示し、或いは他の念仏行者等とジョウ論を企て、又は他をキョウ慢して我を誇る等々）

二、不断に心得て謙讓の徳を發揮し

三、一切の人に融合して身を以って柔軟の徳を示し

四、常に口を謹み人を裁かず、光明団を敵視する者を敵とせず対立せず、

五、団員同志の悪を他に言わず、その人に向かって忠告し、

六、大法に全我を打ち込んで献身的なれ。

七、内巖為本の教旨によつて大信の火を胸中深くもやして不断の充実を怠らず、根強く社会に（潜行的に）働きかけて念仏行者を獲得するに努め、聖会に誘い例会に導き、「聖光」の読者をつくること。

八、名利心を克服して大法の為に無我となり、

九、初めて例会に出席せる人に親切に隔てをつくらず、

その美的長所を拝み、決して初より欠点をつきバ倒叱責非難せず、

一人を千万人と買うてこれを絶対尊重すべし。  
昭和十三年十月六日

夜晃

(三十)

合掌 南無阿弥陀仏

ご病氣の為ご入院とのこと。病氣の為に喜ばなければ貴女のこと、病氣がお念仏のたねとなるから貴女のこと。然し「何処にどうなりましても有難いお念仏」その一語、この一語こそ有難いことであります。十月には会えると思つたのが会えない。会えても念仏、会えなくてもお念仏。お念仏の中にお会いが出来る。

今は正覚寺と一緒に善徳寺にいます。貴女、昔、こゝに来ましたがね、あゝまこと、体の達者な時、聞いてよかつた。正覚寺で叱つておいてよかつた。

大法だけは聞ける日に真に聞いておくこと。何時、貴女のようになるやら知れない。本月は講演をやめて講座にしました。ひよつとしたら又、貴女の宅やら知れない。早くよくなつて下さい。そして今一度、本部の御仏前に出て下さい。本部のお仏前はとて有難くなりました。是非本部にと思つて専心御養生なさい。会いたい氣がします。

今、皆本堂へゆきました。(夜、八時半)正覚の前講です。見えるでしょう。様子が。お念仏なさい。終日。お念仏。

何と言う有難い不思議な因縁でしたらう。永劫離れることのない世界。早く死なないようになさいよ。人間の心ですね。これは。

時々様子を知らせて下さい。

お念仏だけで全てことすむ世界。尊いこと。今日一日をお念仏の中に。

お念仏だけが三千大千世界よりも大きい。

貴女の笑っているかおがみえる。養生！養生専一に。

昭和十三年十月十日

夜晃 福岡九大病院

藤井秀子様

(三十一)

合掌 南無阿弥陀仏……略……

何時に変わらぬ御念仏の心、尊く有難く承りました。御病床も亦御念仏の道場となつて下さつたことであります。肉体のあらん限りは身は生死海につながり、本罪はこれを滅したまうとも、依然として貪愛瞋憎の雲霧のみにつゝまれていることであり

ます。然しながら信心の天は彼等にも障えられず、撰取したまうに変わりはありません。合掌礼拝の相そのまゝがみ親に撰取せられたる相であります。

この月石井の父をつれて山口県にまいりました。幸い体も悪くせず毎日喜んで聞法しています。その聞く父が皆様から尊く拝まれる事実を拝んで、いよいよ説く者よりも聞く者の尊きことを痛感することです。山口県は何処も尊い会座であります。首肩のこりが猛烈で毎日中村夫妻の御厄介になつています。それになかなか暇なき毎日にて「光明」「聖光」のおくれることは相すまぬことでもあります。さりながら私の心をも知り、同胞の心をも知らせて頂き、五年十年と同じ念仏道に結ばれた私は、深く深くみ法を頂戴することが出来るだけで第一の幸者であります。真に幸者であること。順逆の境にありつゝ、誠に念仏だけで真の幸者であること、これ人生の生活の基調であります。

先日原田勝三氏の宅に於いては、「愚禿鈔」の手ほどきを致しました。御流罪によつて藤井善信の姓をたまうたる聖人は、さりとて藤原にも藤井にもかえられず、非僧非俗の「禿」の姓を名乗りました。然るに御赦免後も「慎終如始」再び釈氏を名乗つても禿に愚を添え愚禿と名乗りました。これは号でもなく姓でもなく「称谓」というのであります。例えば出家が沙門何々というが如きを称谓というのであります。「慎終如始」誠に卑謙の徳であります。我が高上がり恥ずかしきことでもあります。いよいよ深く内心にみつめ、罪惡の身を忘れず、罪惡にかゝわらず念仏一道を精進させて頂くべきであります。いよいよ御恩徳のみ深重であります。

今日もしたら又お会い出来ることでもあります。どうか御養生第一にお待ちください。あなかしこあなかしこ

昭和十三年十月二十六日夜

夜晃

中務みつよ様

(三十二)

合掌 南無阿弥陀仏

御無沙汰致し候処、その後、皆々様には御変わりなく念仏御相続の御事と奉賀候。本月はいよいよ結婚なされ、何かと御多忙の御ことなりしことと存じ奉り候。其の節御悦び状も差し出す程の処、例の多忙にて失礼致し候。御念仏なくば結婚も決して悦びには御座なく候。地獄への最大の悪知識を一人加え候ことに御座候。多くの人は、この最大事たる結婚さえも念仏中心には考え申さず、哀れに悲しきことに御座候。幸いに念仏の同胞にとりまかれ、大悲の中に式典をすまされ候こと、誠に御悦びの上もなきことに御座候。この上はお二人ともご本尊様中心にお寺の経営にあたられ候よう、寺多き中の寺として法界に輝きあらしめたまうべく候。結婚当初は兎角愛の洪水に溺れやすきことに候も、愛は敬と礼とによりて小出しになされたく、然らざる時は結婚もやがて呪われたるものと相成り候。

又千代子様には何事も母上の命に従い、福間でのことを持ち込み申さざるように、あくまで光善寺の人に、黒沢の人になられ候ように、すでにその志は有之候ことゝは存じながら申し添え候。出るにも乗り物に街とは様子異なり候へば、先ず足より御練習相成りたく、出入り全て自動車によるが如きことは、永續きすることには御座なく候。くれぐれも永年ご辛苦なされ候母上に御孝養專一に存じ奉り候。

次に三瀬川の嬢は今頃は何処に候や。黒沢に御座るか、何でもない世間の体裁など考え、御法を聞かせざることは遺憾に候。この際、光善寺に永久に引き取りて念仏のお育て肝要と存ぜられ候。三瀬川におくことはあまりに可愛相に存じ奉り候まゝ申しすゝめ候。

何事も何事も念仏中心に御暮らし相成たく候。母丈によろしく。 敬具

昭和十三年十二月二十九日

大森忍様

夜晃

これは書きかけ。十一月に旅から出そうと思つて人が来て書けなかつたもの、ついでに送つておきます。

合掌 南無阿弥陀仏 この間はお手紙有難う。その後お変わりなく御精進でありますか。

東部地方の旅も、あと福山が一ヶ所になつた。津山も一回一回と有難くなつて来る。4 教頭さんが熱心に聞いて下さるだけでも有難い。

さて、この間の御手紙の趣、別に驚くべきことではない。あんな風になることは始めからわかつていたことで、若し沈黙して念仏して考えて下さる方なら別れる必要はなかつた筈だ。こちらこそ沈黙すべきである。こちらに志のないことだつたらその内にはわかる。

私の悪いことは、受け取るしか仕方がない。決して私が勝つたのではない。正に私の敗北である。私の敗北ならこそ私から身をひいたのである。それも仰せの通りである。全て沈黙して、いよいよ精進しよう。私たちには行くべき道がある。化縁つきぬれば仏天の御計らいのまゝに他に赴くのが大法の法則です。あの方の為に、益田まで解消するも亦よきことにて候。他にいくらも、小生を必要とする処は待つております。唯これ迄と同じく、本部の会座の延長としてのみ、同じこゝろで参上致す考えです。聖会に来なければ黒沢も同じことです。